

# 「総ぐるみ」新聞

NPO 総ぐるみ福祉の会事務所は日限山 4・45・10（八四六一八八五〇）  
入会や活動のお問い合わせ先は、事務所または「日限山荘」日限山 4・7・1

地域の方による講演会

## ヘルパー体験談

石井 瑞代さん（3丁目在住）

7月7日（土）、西洗・港南プラザ自治会館の2階日本間にて、標記の講演会が開かれ、27名の方が出席されました。介護事例を交えた興味深い講演内容を紹介します。

### ◆訪問入浴サービスヘルパーからスタート

昭和61年に、日限山の津久井産業が入浴サービス事業を始めるというので、1月に採用されました。当時入浴車が2台あるものの経験者はいないので、水戸のデベロという入浴車製作会社に行つて、私達ヘルパーが水着姿で体験研修を受けることから始まりました。

### ◇湯温37℃を体験

浴槽の湯温は37℃のぬるま湯で、7〜8分浸かつて出る瞬間は寒く感じたのに、着衣後はボカボカして暖かさが継続し、湯冷めはなく、体に良いことを実感しました。

### ◇仕事始めは鶴見区から

最初の仕事は、高齢化が進んで寝たきり老人が多い鶴見区でした。入浴車にヘルパー2人と看護師とオペレーター各1人が乗り、鶴見まで行つて1日に2〜3人入浴さ

せて回り、入浴料1人二千円では大赤字の仕事でした。しかし、長い間お風呂に入れなかった利用者や家族からは、とても喜ばれ、感謝されました。

### ◇横浜市内でデモストレーション

在宅福祉の始まりの頃で、横浜市内各区の福祉事務所を通じて、入浴サービスの普及のために、デモストレーションをして回り、徐々に利用者と利用エリアが広まっていきました。

### ◇行政委託事業にするよう横浜市に申請

当時他の政令指定都市、仙台・神戸・大阪・福岡などでは、入浴サービスは行政委託事業になっていて、横浜市は遅れていたの、横浜市にも委託事業にするように署名運動をして、毎年申請をしていました。

平成元年頃に申請許可が下り、入浴サービス事業者は東京からも参入して、津久井産業は栄区や港南区等の地元サービスを行い、他には、町田市・相模原市や小田原市の委託業者になり、サービスを行いました。

### ◇歌う入浴サービスの開始

入浴後は、皆さん「食欲が出た」「よく眠

れる」など満足していただきましたが、言葉に障害のある人、また認知症の人などの入浴サービスに係わる時、入浴が楽しい時間となるように、元気な頃の懐かしい歌を歌うと、表情がイキイキして、一緒に歌う方も出てきました。

ある認知症の方の例ですが、入浴前に衣服を脱がせると、羞恥心もあるのでしよう、引つかく、噛み付く、目に指を入れるということで、やむを得ず手をタオルでぐるぐる巻きにしてから浴槽に入れる状態でした。東京出身ということを知ったので「東京音頭」を歌いながら入浴するようにしたら、表情も落ち着き、タオルも必要なくなり、歌がいかに人の心に響くのかを実感しました。

### ◆福祉サービス協会のヘルパーに

平成6年、55歳になったとき、福祉サービス協会のヘルパーになりました。仕事は各福祉事務所を通してきます。協会のヘルパーは一人からいるのに、最初の仕事は、施設入所も病院入院も無理という重度の精神障害で、片麻痺の人の所でした。

### ◇事例1 60歳の男性

8月3日の猛暑の中、訪れた鶴見のアパートは窓を締切り、電燈に黒いビニル袋をかぶせ、物が散乱した薄暗い中で、青い顔で汗を流して座っていました。まず窓を開

けたいと思い、「誰か入ってきたら私がやつつけるから」と恐怖心を除くように声掛けして、開かせてもらいました。

コミュニケーションが難しく、冷蔵庫にはかき氷とわずかな食品があるだけで、体力・食欲の減退が著しい状態です。会話が困難で、いつも発する「声が出ないよ」という言葉にはいろいろな意味があることが判り、観察と訴えの汲み取りを心掛けて、しだいに心が通じるようになりました。精神障害の方は自信がないために、命令されたり、説得されたり、否定されることを極端に嫌います。また、どんな場合にも、人間の尊厳を失うような言葉掛けだけはしないように心掛けました。

#### ◇事例2 86歳の男性

86歳の脳梗塞で失語症の寝たきりのご主人を、80歳の腰痛症の老妻が、多少認知症が始まった72歳の奥さんの妹さんと共に介護している所に伺いました。妹さんがおむつ替えや着替えを行い、奥様は3食の食事作りと分業をされていました。家の周りが階段ばかりで、外へ連れ出すことができずにストレスがたまっているのではありません。胸をつかまれたりしましたが、お餅つきをさせてあげることにして、ペッタンペッタんと数回胸を叩いて、終りとなりました。

ある時、一番の歌詞しか知らない「かこの鳥」を歌ったところ、失語症なのに、4番まで歌われたのに驚きました。また、奥様が側にいないことに不満な様子が度々見られるので、車椅子で台所にお連れし、「ご飯

を作っているのよ。良い奥さんよね」と話しかけ、奥様も、ご主人が台所へ来たのは何年ぶりかしらと、良い交流ができました。

また、タール便の出たことがあり、耳の不自由な奥様にかわって主治医に連絡してヘルパーが入っていてよかった例です。

#### ◇事例3 92歳の女性

72歳頃から認知症が始まり、17年間在宅で過ごす92歳の女性。ほとんど会話はなく、食事・排泄・歩行は全介助状態です。同居の長男夫妻、72歳の夫は腰痛持ち、67歳の妻は心臓疾患がありながら母親を大切に看ています。1年余りの関わりでしたが、亡くなる1週間前まで、寝たきりにさせない介護でした。訪問を始めた半年後に、女性の下顎前歯8本の入れ歯が壊れ、食事・水分補給が極端に困難になりました。

すぐ訪問歯科診療を申込みました。しかし衰弱が日増しにひどくなる状態でしたが、3週間目に新しい入れ歯ができて摂食能力が戻り、体力回復に向かいました。その後、主介護の長男の妻が脳梗塞を発症し、吐き気や手足の痺れを訴え、「睡眠不足を解消したい」といわれます。そこで、起床時からホームヘルパーに介護を委ねることになり、午後も安静時間を保って、健康回復に専念していただきました。6時間滞在型のヘルパー支援によってできたことでした。

その後、女性は食欲低下、歩行不可と意識の減退が見られるようになり、本人も介護者も精一杯、限界のところまで、最期を迎えました。

### 山元町被災高齢者の

## 下着支援報告

宮城県山元町の被災高齢者は、当初八〇九名ということでした。これは仮設住宅に居住の人数で、住居が半壊・全壊となり、県外や近郊に移り住んだ方、半壊住居の2階等に暮らす方々も、下着支援の対象に加えてほしいという強い意向で、6月初旬に届いた最終支援人数は一、一九九名でした。

グンゼ㈱の「快適工房」の製品で、男性にはU首半袖シャツとブリーフ、女性には3分袖スリーマーとショーツを1組ずつ支援することにして、地元の森屋と株木商店という二つの衣料品店を通して購入することにしました。グンゼ㈱も上代価格の52%でこの2店に卸してくれましたが、必要金額はマージンを加えて一〇三万九千二百円となりました。NPO総ぐるみ福祉の会に寄せてくださった支援金に加えるため、同窓会や所属団体他にもお願いに回り、目標金額を集めることができました。そして、7月4日から支援下着の配布が始まりました。7月14日には、現地のNPOささえ愛山元の中村理事長に支援記録の贈呈式が行われ、藤井も出席して、山元町の現状を見てきました。



7月14日、下着支援の目録贈呈式